

1月3日 成人式が開催されました

1月3日、すこやかセンター伊野で成人式が開催され、20歳を迎えた280名が成人の仲間入りをしました。式典に参加された新成人の皆さんは、久しぶりの再会でお互いの近況を話したり、写真を撮ったりして成人の日を迎えた喜びを分かち合っていました。

式典では来賓の祝辞を受け、武智龍也さんが、「社会人としての義務と責任を自覚するとともに、今後個人個人が自己完成に努め、地域の繁栄、郷土の発展のため、力を尽くしたい。」と謝辞を述べられました。また町からの記念品を、新成人を代表して山中綾さんが受け取られました。

新成人の主張では、大久保有梨さん、森脇友紀さんの2名が今までの体験や今後に向けての希望や決意を述べられました。(発表内容は次のとおりです) 社会教育課

「お兄さんは立派ね。」小さいころよくこの言葉を耳にしました。私の兄たちは世間で言う立派でまじめな優等生。勉強もできスポーツも上手にこなします。しかし私といたら、勉強・スポーツ共々普通で何一つ兄たちに勝るものがありませんでした。その事実は私にとつてかなりのコンプレックスとなりました。小さいころの口ぐせといたら「どうせ私はお兄ちゃんとは違うもん。」というものでした。だれ一人兄たちと私を比べてはいないのに自分の中で比較してしまつてひがみ、努力など一回もしてないのに何か悪いことがあるとその決まり文句を言っていました。



大久保有梨

そんな自分が嫌で、変わりたいと思っていたとき私が通っていた高校で交換留学ができたということを知りました。私の兄たちは英語が話せませ

ん。何か一つ勝るものがほしいと考えていたのでこの大きなチャンス絶対に入れようと思いました。ライバルたちとも競り合いの結果私は見事交換留学生2人の枠に入ることができました。それは私が変化するきっかけとなったのです。

1年後、私は期待と不安を抱えながらアメリカのミネソタ州に留学しました。当初私は英語が苦手な単語能力もなく全く話せませんでした。そして人見知り、恥ずかしがり屋という性格もありホストファミリーとのコミュニケーションや友達づくりに苦労しました。親のもとでわがままを言って過ごしていた日々がどれだけ楽で幸せなものか分かりました。辛い日々が続く中、私も他の留学生同様ホームシックにかかり、毎日寂しく悲しくて泣いていました。いつそ日本に帰ってしまいたいと思つたこともあったけど、変わりたいという自分の決意を胸に頑張ろうと立ち直ったとき、私の人生最大の岐路に立たされました。当時私がホームステイしていた家族が初めての生徒ということでも外国人の対応に不慣れでした。ホストマザーは私が精神病にかかっ

たのではないかと勘違いしてしまい私を日本に強制送還したほうが良いと提案をしました。

私の意見は全く聞いてもらえず、私は精神病患者として日本に帰らされました。自分一年という留学生生活を最後までやり遂げて自信をつけて帰ってきたので自分がホームシックにかかつて泣いたこと、強制送還をされたことをすごく悔やみました。ホームステイのお母さんを憎んだことを覚えていません。しかし、帰国後一番辛かったのは両親だと知りました。私を心配した両親は成田空港まで私を迎えに来てくれました。そこで会った両親の顔、今でもはつきりと覚えています。やせ細つてやつれてしまった顔を見てなんて自分は情けないことをしてしまったのだろつと落ち込みました。実家に帰つてもこの思いは離れることがなく、うつ病寸前までいきました。そんな中オーストラリアでもう一回やり直してみないかと提案をされました。自信を失っていた私はなかなか前進することができませんでした。でも、もう一回だけ自分の気持ち奮い立たせ親のため自分の人生のためアメリカの皆

を見返すためにオーストラリアへ行く道を選びました。

オーストラリアは気候もよく人柄も温厚でマイペースな私には快適な場所でした。私は自分に自信をつけるため日本の高校を自主退学しオーストラリアで再スタートしようとして決意しました。留学生ではなく普通の生徒としての海外での高校生活は大変なものでした。でも、自分で決めたこと、責任を持つて最後までやり遂げる自信はありました。そして入学して2年後2007年、同年の子より2年遅れてやっと高校を卒業しました。それは私にとつてかなりの自信となりました。人は失敗して成功するもの。失敗は確かに辛いものでも、チャンスでもあるのです。アメリカでのあの辛い経験は私のこれからの人生の糧となるでしょう。私は今年オーストラリアの大学で教育学部に入学します。英語の素晴らしさをもっと勉強し皆に伝えたいと思います。私たちの人生はこれからです。自分次第でいくらでも変わることが出来ます。責任感をもっと持ちいろいろな場所へ活躍していきたいと思います。